

「批評力」を育成する学習活動の工夫

—高等学校現代文『歴史』について考える』という単元の場合—

石井 希代子

本稿は、学習者の「批評力」を育成する学習活動の工夫として、「テキスト」を批評する活動に加え、自分たちが作成した「批評文」について相互批評する活動を取り入れた授業実践を報告するものである。

1. はじめに

現代文の授業では、近代以降に書かれた文章を読んで、その文章の書き手がどのような問題に対してどのような立場から何を論じようとしているのかを的確に読み取ること、読み取ったことや自分の考えを適切に表現すること、そうした活動を通してものの見方や感じ方、考え方を深めていくことが目指される。特に新しい学習指導要領では、「現代文B」の内容として、指導事項ウ「文章を読んで批評することを通して、人間、社会、自然などについて考えを深めたり発展させたりすること」と明記されており、「批評する」という活動は、学習者の考えを深め発展させることにつながるものとして重視されている。ここでいう「批評」とは、文章や考えに対してその是非・善悪・正邪などを指摘して、自分の評価を述べることであるが、それは単なる感覚的な印象の表明ではなく、明確な根拠を持って論じられるものである。

当校では、文部科学省の研究開発校の指定を受け、2011年度までは「クリティカルシンキングを育成する中等教育 教育課程の開発」に取り組み、2012年度から「持続可能な社会の構築をめざしてクリティカルシンキングを育成する、新教科『現代への視座』柱にしたすべての教科で取り組む中等教育 教育課程の研究開発」を行っている。この新教科「現代への視座」の科目のひとつとして、高校1年次に「クリティカルシンキング」という科目が設定されており、学習者は「論理的説明」の手法や、「論証の正しさを検証する」手法を学んでいる。

本稿は、2011年度にこの「クリティカルシンキング」の授業を受けた、2012年度5年生(高校2年生)を対象に実施した授業の記録であり、2012年11月30日に行われた本校教育研究会の公開授業で発表した授業実践を報告するものである。

2. 単元構想

(1) 「歴史」という問題領域について

学習者たちは小学生の頃から学校の授業で「歴史」を学び、テレビや映画、小説や漫画などのメディアをはじ

めとして日常生活の中でも多くの場面で「歴史」に触れている。また、昨今の近隣諸国との関係についての報道で歴史認識の違いなどを意識する場面も多い。当たり前のように見聞きしているこの「歴史」について学習者はどのように考え、向き合っているのか、「歴史」に対する認識を深め考えていくことは、学習者が現代社会の諸問題について考えていく手がかりとなるのではないかと、これが本単元を構想した出発点である。

本単元では、学習者自身の「歴史」のとらえ方、向き合い方を確認し、「歴史」について書かれた様々な文章を読むことを通して、「歴史」をどのようなものとしてとらえ、どのように「歴史」と向き合っていくべきだと考えるのか、学習者の「歴史」に対する見方や考え方を深めることを目指した。

(2) 学習前の学習者の「歴史」についての認識

テキストを読んでいく前に、次のような項目について学習者がどのように捉えているのか、自由記述による事前調査を行った。

- ・あなたは歴史をどういうものだと考えていますか。
- ・あなたは歴史を語ることの意義や目的をどのように考えていますか。
- ・あなたは「歴史を学ぶことの意義や目的をどのように考えていますか。
- ・あなたは歴史に触れるときにどのようなことを心懸けていますか。

学習者が提出した文章を分析した結果、彼らの捉え方には二つの傾向が見られた。(以下、傍線は稿者による)

① 教訓や指針を与えてくれるものだとする捉え方

○歴史を学ぶことは、成功・失敗に関わらず過去の出来事を通して教訓を得、未来をより良くするためにその教訓を生かすことだと思ふ。現代社会でも何千年前の思想に通じるものもあると思ふし、それらは現代を生きる上でも役立つことがあると思ふ。また、特に過去の過ちに関しては、それらを二度と繰り返すまいと人々は大きな教訓を得ると思ふ。このように歴史から学ぶということは、生きる上では大きな糧になると思ふ。(B組男子)

○歴史は過去の出来事を現在生きている私達に示し、今起こっている問題にどう対処していくべきなのか、今後どのように時間は過ぎていくのかを想定する際に、手がかりになるものだと思う。今の状況だけを見て想定するよりも、歴史から読み取り、想定する方が、より具体的に想定しやすい。どうすべきかを示してくれる、教訓のような部分もあり、歴史から学べることはたくさんあると思う。(C組女子)

これは一例であるが、5年生5クラス(欠席を除く)189名中、111名が「現在に活かすためのもの」と捉えた記述をしている。

②解釈の一つだとする捉え方

○歴史というものは、後世の人間や今世の人間のうち、勝った方が残すことが多く、また過去のことになればなるほどその傾向は強いと思う。何故なら記録を残す者の意図が必ず文書・口伝に関わらずあるがままの客観的事実を歪めてしまうからだ。だから歴史について学んだり語ったりする時に、それが論理的な証拠、絶対的な証拠をともなわないものであるとき、一種の物語・解釈であるということ忘れてはいけないと思う。歴史は解釈や視点によって変わるものであり、事実であるとしても真実ではないと思う。(C組女子)

○歴史とは「過去を題材として書かれたノンフィクション」と言えるのではないかと思う。もちろん歴史を構成する事実たちは概ねが事実であるという点では物語とは言い難いが、どの出来事をより重視しその出来事のどのような側面を見せるかは歴史を語る人間次第である。たとえば太平洋戦争において、日本は爆弾の被害の悲惨さを前面に出すのに対して、米国は真珠湾攻撃の卑怯さを前面に出す。また歴史を語る際、語り手は大概自分が属する共同体を良く見せようとする。そういう視点で見れば、歴史を他人に語って聞かせるこということはプロパガンダの意味合いもあるのだらうと思う。(E組男子)

58名が「歴史を語る者の恣意」を問題にした記述をしている。なお、「教訓や指針を与えてくれるものだとする捉え方」と「解釈の一つだとする捉え方」両者を融合した形で記述する者もいた。

こうした記述の中には、

○歴史というのはありのままの事実ではないと、世界史の授業で言われたことを今でもはっきりと私は覚えています。それまで私は「歴史＝昔に起こったこと」としてしかとらえていなかったのので、歴史には嘘や歴史を記した人の意見が反映されていると知って、よく考えればそれは当然なんです、ショックでした。(D組女子)

○私は、歴史というものを「過去の出来事を今に伝えるもの」と考えます。しかし、古典の授業で扱う大鏡などを読んでみると、そこには語り手の意見、考え方が強く影響しているとも感じます。時には語り手の意識が強く影響すぎて事実の方が枉げられてしまったという例もありました。そもそも実際に見た人が

今現在生きているはずもないので、客観的な歴史などどこにも無いという結論に至ってしまうので、その点から考えると、歴史というのは「物語」と「事実」の合いの子のようなものだと私は思います。(B組女子)

のように、世界史や古典の授業で学んだことと関連づけて述べているものも複数いた。

その他の少数意見としては、「歴史は繰り返すものだ」、「現在に至るまでの過去の事実の積み重ねだ」とするものなどがあったが、「学ぶ意義を見いだせない」とするものとして次のようなものがあった。

○歴史を学ぶ意義は、正直よくわからない。何百年、あるいは何千年も前の出来事を知って、今の時代に直結しているような、まだ役に立つようなことが何か得られるとは、あまり思えない。(A組男子)

○歴史を無駄なものとして考える。現在の世界は、様々な分野で発達を繰り返している。現代社会において今より昔の方が便利で過ごしやすかったのにと嘆く人はおそろくないと思う。その中で、果たして今より不便である歴史を振り返る必要があるのだろうか。歴史について深く学んでいないからこそ言えるのかもしれないが、今の自分には歴史を学ぶ目的が分からない。(C組男子)

(3) テキストについて

テキスト1 佐藤健二「歴史と出会い、社会を見いだす」

『いまこの国で大人になるということ』(紀伊國屋書店、2006年)に掲載されている文章の一部。この文章の中で筆者は、過去がわれわれの現在を支えているという事実に気づき、そうした人間社会の歴史の中にどう自分を位置づけて受け入れるのかを考えることが「大人になる」ことの条件の一つであり、「大人になる」とは「歴史」と出会い、「社会」を見いだすことであると言う。そして、近代以降の社会が進歩・発展を無条件に望ましい価値であるかのように語り、「新しさ」を無意識に尊ぶ態度を蔓延させたことによって、人々の中で過去を軽視し未来の目標からのみ現在を問題とするような考え方(現在中心主義)が広がったことを指摘している。その結果、現在に生きるわれわれの意味づけが掛け合わされてはじめてそこに存在する「歴史」が単なる事実の足し算として捉えられるようになり、今を考え直すことに繋がられていないという問題が生じていることを明らかにし、そこにいまこの社会で「大人になる」ことの難しさがあると述べている。

テキスト2 丸山真男「幕末における視座の変革」

『忠誠と反逆—転形期日本の精神史的位相』(ちくま学芸文庫、1998)に掲載されている文章で、「幕末における視座の変革—佐久間象山の場合」の一節。この文章

の中で筆者は、歴史上の人物や思想に対する評価の方法を問題としている。今日われわれが到達した歴史的時点における知識や価値基準をもとに、過去の出来事や思想について、その歴史的限界を指摘するような評価方法では、過去の思想から学ぶことはできないことを指摘し、過去から学ぶためには、現在の知識・価値基準からではなく、できるだけ当時の価値基準から捉え直すとともに、その歴史的状況を典型的な状況に抽象化し、今後当面する可能性を持ったものとして主体的に読みかえていくことが必要であると述べている。

テキスト3 内山節「歴史と『みえない歴史』」

『日本人はなぜキツネにだまされなくなったのか』（講談社現代新書、2007）に掲載されている文章で、第四章「歴史と『みえない歴史』」第二節途中から第三節にかけての部分。この文章の中で筆者は、人々の問題意識の変化によって歴史学の中心が「制度史」から「人間史」・「社会史」へと転換していったことを述べた上で、「主観」を排し客観的事実のみをとらえた歴史を描くことは不可能であることを具体例を挙げながら説明している。さらに、主観を排そうと思えることはできても、実際に主観を完全に排すことはできず、現在「客観的事実」だと捉えられている歴史的な出来事も多くの事実の中から、ある主観によって選び取られたものである以上、別の視点から別の事実に注目して歴史を読み解くこともできるはずだという主張へとつながっている。

テキスト4 羽田正「新しい世界史へ」

『新しい世界史へ—地球市民のための構想』（岩波新書、2011）に掲載されている文章で、序章「歴史の力」と第四章「新しい世界史の構想」の一部。この文章の中で筆者は、歴史が現代に生きる私たちによる過去への問いかけであり、時代の変化によってその問いかけは変わっているにもかかわらず、現代に必要な歴史認識が提供されていないと指摘した上で、従来の国ごとの世界史に変わる「地球社会の世界史」の必要性を述べている。そして、その「地球社会の世界史」とは、相互に影響を与え関連し合いながら複雑に動いている現代世界の出来事を国や集団単位ではなく地球規模で捉えようとするものであり、世界各地で生じている数多くの難問を解決するための基盤となる「地球市民」という帰属意識の形成につながるものだと説明している。

今回の調査では、歴史を学ぶことに価値を見いだせないとする層はかなりの少数ではあったが、こうした層に働きかけるものとして「現在中心主義に陥り、過去を軽視する姿勢」の問題点を指摘したテキスト1を用意した。そして、歴史は現在に活かせる教訓や指針を与えてくれ

るものだと考える層に対しては、「単に過去や歴史から学ぶといっても、真に過去や歴史から学ぶためにはどうすべきなのか」について投げかけているテキスト2が、学習者の思考の揺さぶりには有効であろうと考えた。テキスト3は、「歴史は解釈であり、視点を変えれば別の解釈もあり得る」ということを述べた文章であり、同じように考えている学習者が納得・共感することが予想されるテキストである。しかし「客観的事実など捉えられない」という結論をもとにして「だから歴史など学んでも仕方がない」となってしまつては意味がない。こうした認識の上でどう「歴史」と向き合っていくかが重要だという方向に思考を向かわせたい。そこで学習者の意識を「これから」に向かせるものとしてテキスト4を用意した。このテキストは、これからの社会に必要な「新しい世界史」を作る必要性を説いたものであり、新たな可能性を提示しているものとして、学習者の思考を揺さぶり広げていくことのできるものだと考えた。

(4) 授業展開について

テキスト1～4を読み、4人の筆者が述べていることについて、その妥当性をどのように考えるか意見文を書かせた（批評活動1）。その後、書かせた意見文をクラス内で発表させて互いに読み合わせ、その意見の妥当性についてまた意見を書かせて発表させた（批評活動2）。

3. 批評活動の実際

内山の文章に書かれた内容に基づいて丸山の文章の内容を疑問視する意見が、どのクラスにおいても複数見られた。

(A) 内山さんと丸山さんの文章を読んで、内山さんの考えていうと、丸山さんの過去を理解するという行為は絶対にできないのではないかと思った。丸山さんは、過去の当時の状況、価値基準にわれわれ自身をおいて過去を理解すると述べていた。これは私達の今の状況、価値基準をとりはらって、過去を見るということであるが、価値基準などは私達の主観によって判断されるものである。対して、内山さんは完全に主観を排することはできないという。この二つの意見をあわせると、過去を理解するということはできないのではないだろうか。(C組女子)

そして事前調査の結果にあるように、もともと学習者の中にも「歴史は解釈の一つで、客観的真実をあらわしているわけではない」という認識があったためか、次のように内山の文章に共感を示す文章も多かった。

(B) 内山さんの文章は、まさにその通りだと思う。僕が正しいと考える歴史と、例えば他の地域の人が正しいと考える歴史が

違うことなんてよくあることだ。二人ともその当時に生きていたわけでもなく、その歴史を「客観的事実」として伝えようとした、何かしらによって得た歴史であるはずなのに。そして、これは地域差のせいでもないのかもしれない。数年前の新撰組の大河ドラマで英雄だった近藤勇は龍馬伝のときにも悪者になっていた。これこそ歴史が主観に依存する最たる例だろう。アポロ計画だってアメリカが自国の力はすごいんだと世界に見せつけるための嘘だったと主張する人もいるくらいだ。本当に自分が体験し実感したこと以外の情報が客観的になることは決してできない。ということは純粋な事実が歴史として語り継がれることはないだろう。とすると最も客観的な事実に近い歴史は、世間的に一般的な解釈、その程度のものでしかないはずだ。(E組男子)

こうした意見に対し、

(C)丸山さんと内山さんの文章を読んで、噛み合わない部分があるように感じた。丸山さんは「過去」を現在に活かすには、現在の条件を取り払った過去を想像することが第一段階として必要だとしている。ところが、内山さんは「過去」を「現在の問題意識からとらえられたひとつの時代認識」とし、「事実としての過去はつかみえない」と言う。現代に生きる我々の主観を取り去ることはできないとする内山さんの考え方では「過去の追体験」は不可能ということになってしまわないか。この疑問について考えた。内山さんは主観をなくせると考えるのは誤解だとするが、私は丸山さんがその点を誤解している訳ではないと思う。丸山さんは、「過去の追体験」に加えて、「状況の抽象化」が大切だとしている。この抽象化は、過去を現在に活かすための重要段階だ。つまり、最終的には現在の視点によって過去を評価することが必要になる。「追体験」で完全に過去を再現することは不可能でも、できるだけ近い条件を考慮する努力をする中で、見え方の癖や問題点に行きあたるかもしれない。これは内山さんの言う「問題意識」につながると思う。つまり、過去を見る現在の視点が重要であると言っているのは二人とも同じで、本当に客観視や完全な追体験が可能かは問題ではないのだろう。(C組女子)

と、自分なりに考察している学習者もいた。授業では、

(A)のような意見、(B)のような意見、(C)のような意見を併記し議論させた上で、内山の文章を基にして丸山の文章が間違っていると判断するのは妥当なのかという観点を提示し、それぞれの批評文を批評させた。

(D)私も丸山さんと内山さんの論について書くと思っていたのですが、読めば読むほど二人の論が対立しているのか同じなのか混乱してしまって、とりあえず二人の文章を比較するのを放置していたのですが、今回の「丸山さんと内山さんの比較」について書いた人たちの意見を読んで、私の中で混乱していたものが整理されたような気がします。つまり、二人の意見は対立していたり同じであったりするのではなく、それぞれの主張のポイントが違っていたということでした。そう考えると、二

人の意見は比較するというよりも、それぞれの主張を個別に考えればよかったのかなと思いました。(B組女子)

(D)の学習者は(C)のような意見を読んだことで、再び本文の記述に立ち返り、丸山が過去の思想から学ぶために必要なステップとして「できるだけ、その当時の状況に、つまりその当時のことばの使い方に、その当時の価値基準に、われわれ自身を置いてみる」ことを求めているにすぎないこと、「できるだけ」とあるように完全な過去の追体験(=主観の排除)を求めているわけではないことを理解し、丸山と内山の論の間に「主観を排除できる／できない」という主張の対立は存在しないことに思い至った。

また、内山の言う「主観を排した客観的歴史を描くことはできない」事実を踏まえた上で、それを否定的に捉えるのではなく、だからこそ「現在」の問題解決につながるものとしてどのように意味づけ、読み解いていくのかを重視すべきだと考える意見を書いている者もいた。

(E)そもそもなぜ「歴史」が語り継がれているのかというと、人々は過去から何かしらを学ぶためだと思う。内山さんは主観なしで歴史は語れないと主張しているが、全くその通りだと思う。むしろそれで良いと思う。主観によって選択された「客観的事実」から、自分の問題意識に応じたものを学ぶことができるなら、何ら問題はない。だが、丸山さんは歴史を学ぶ際の留意点を述べている。私たちは現在の視点から過去の出来事を見る傾向がある、という主張だが、確かに例えば過去の人物を批評するとき「当時の人にしては凄い」と現在の評価に基づく評価を下して、過去の人物がどういった状況でどのような判断を下したのか、という過去に視点を置いてより深い評価をする、ということを疎かにしているような気がする。また、羽田さんも歴史の学び方に提言しており、歴史を国、民族単位でなく、地球単位で考えるべきだ、という主張だ。丸山さん、羽田さんは共に、歴史の学び方のポイント・注意点を述べており、まとめると、私たちはより広い視野で歴史を捉えるべきであり、歴史のとらえ方には我々のものとは異なる、別の視点から捉えられたものがあると伝えている。これらのことに留意しつつ、佐藤さんの文章にもあったように、「歴史」を今を考え直すためのもの、つまり今を生きる私たちの糧になるものと考えて、歴史を勉強しなければならない。(C組女子)

(F)内山さん曰く、「過去とは現在から照射された過去であり、「ここに成立した過去とは、事実としての過去ではなく、物語られた過去」であって、一切の主観を取り除くことが不可能である私たちは、本当に純粋な客観的事実だけを捉えることは出来ない。内山さんはここで、「客観的事実」とは何かについて指摘する必要がある、「客観的」と言えども、それらは主観によって選択されたものであることを自覚すべきだと述べており、そうすることで、今認識している過去を別の視点から違う形の実事として捉えることも出来ると言っている。しかし、現代にお

いて本当に必要なのは、そうした過去のとらえ方ではないように思う。人が過去を知ろうとする目的は様々あるだろうが、それらの中で、羽田さんの言うように現代社会における諸問題を解決することが最も重要な目的の一つとして挙げられる。この目的の為に過去を知るとするならば、ここで必要になってくるのは、主観を排した客観的事実ではなく、主観を携えて現代に生きる私たちが積極的に主観をもってして解釈する過去ではないだろうか。多面的に過去を見ることは、確かに新しい歴史の側面の発見や別の解釈の気づきに私たちを導き得るが、そこには現代での問題解決への糸口が見つかる可能性は限りなく無いに等しいように思える。色々な視点から過去を見ることは歴史への理解を深めるだけで、現代において役に立つかどうかという問題とは別のものであるから、ということも理由の一つではあるが、より大きな理由として、「現在から照射された過去」であるからこそ、現在を通して見た過去に現代での諸問題の糸口の存在という価値が生まれてくるからということがある。現在から過去を見ることで、現在と過去の比較をし、現在でも活かせることを過去から学ぶ。そういう形で過去を知ることが必要なのだと思う。(E組女子)

(E)の学習者は4つの文章全てに言及しながら歴史とどう向き合うべきかを述べている。(F)の学習者は内山が別の視点から過去の事実を歴史として選択する可能性について述べていることをもとに、こんなふう読み解くことも可能だと歴史解釈の可能性を広げていくことと、羽田の文章にあるように現在の問題解決につながる歴史の読み解き方を模索していくこととを比べて後者を支持している。

(F)の学習者の意見は、次のように

(G)私は(F)さんの意見に「成程」と思いました。私はこれまで「過去の客観性」にばかり囚われ、その先にある「問題解決」にいかにかすのかまで頭が回りませんでした。言われてみると、確かに私達が必要とするのは「現代」に通じる「過去」であって、過去の出来事から何を読み取るかが重要なのです。ということは、ここで「客観性」は然程重要になってこないのではないのでしょうか。羽田さんの話にある「新しい世界史」では国同士の問題もあるため重要でしょうが、個人個人の枠で考えたとき、その「客観性」はテスト・研究以外でどれほど重要なのでしょうか。改めて「客観性」という意義を考えさせられました。(E組女子)

「主観を排して歴史を描くことはできない」という内山の文章に囚われていた学習者に新たな気づきを与えるものとして作用した。しかしその一方で「多面的に歴史を捉えようとする」姿勢を否定的に捉えているとも受け取れる文章であるが故に、

(H)(F)さんの意見について、積極的に主観を持って過去を解釈することが現代社会における諸問題を解決することにつながるために必要だという意見には賛成するが、過去を解釈す

るためには、多面的に過去を見て、さまざまな解釈を見つけた上で、どの解釈が妥当かを主観的に選ぶことによって問題解決を図った方がいいと思った。(E組男子)

という意見も出され、「多面的に過去を見ることは、確かに新しい歴史の側面の発見や別の解釈の気づきに私たちを導き得るが、そこには現代での問題解決への糸口が見つかる可能性は限りなく無いに等しいように思える。」という部分は言い過ぎではないかという批判がなされた。授業では、この意見を受けて(F)がどういう意図でこのように表現したのかという理由を説明し、より真意の伝わる表現への修正がなされた。

また、もう一つ大きな論点となったのが、羽田の「新しい世界」についてである。

(I)私は羽田さんの文章に最も納得がいき、よく理解することができた。まずこれまでの世界史はそれぞれの国の主観に基づき述べられている、ということにはとても頷けた。私自身、世界史を勉強するとき、ある国を主人公のように語った参考書では交流のあった他文化のことはたいぶ脇役のように述べられており、理解に時間がかかったり、つながりが覚えづかったりした経験がある。なぜ覚えにくかったのか、この文章を読んでわかった。世界の歴史はそれぞれが多様な文化を作り、互いに影響し合って生まれていくものなのに、一つ一つだけを見てもその意義が何か理解できるはずがなかったのである。なので、羽田さんの考えは推奨すべきだと思う。文化が個々に捉えられてしまうと、それが他の集団との意識的な隔たりにもなってしまうと思うし、地球規模の問題に団結して取り組めない。そうではなく、これまでの歴史を横のつながりを見ていけるように、広い視野をもつようにし、私たちは地球市民として歩んできたのだと認識することが大切だと思う。なので、羽田さんの述べる新しい世界史はとても意味があるものだと思う。(D組女子)

このように、羽田の提唱を肯定的に受け止める意見がある一方で、実現不可能であると考えて否定的に受け止める意見も多くあった。

(J)まず歴史とは過去から積み重ねてきた膨大な事象の中から時代に必要なことだけを選択し、組み合わせしていくものだと解釈した。その上で、羽田さんの意見は机上の空論ではないのかと思った。世界中の人々が一体となり、様々な問題に取り組む。たしかに理想的であろう。しかし、そうなった場合にも、必ず全ての国々を指導していくものがでてくるだろう。なぜなら人間は自分の不利益なことをわざわざしようとは思わないからだ。そしてその結果、指導者の歴史が作られるだけではないのか。また「共有すべき世界史」とあったが、それを作り上げるのは一体誰なのだろう。仮に世界中の人々が集まって作ったとしても、自国が不利になる出来事を認めるはずがないだろう。しよせん人間は本質的に自分さえ良ければそれでいいという考えを持っていると思う。世界一体となろうなど、

力ある少数の国のたわ言ではないか。さんさん好き勝手にきたにもかかわらず、解決するためには力が足りないから協力しようとは虫がよすぎるのでは。(C組男子)

(K)羽田さんの文章と内山さんの文章には類似した点があると思う。歴史についての解釈は過去と現在で異なり、主観が入っているものであると両者は述べている。しかし、その後の主張は異なっている。内山さんは主観によって選択される「客観的事実」に注目し、選択されなかった事実を考え、その事実を基にした歴史解釈の可能性を主張している。その一方で、羽田さんは国、社会によって異なる歴史解釈を、世界全体で統一すべきだと主張しているように感じる。地球規模という巨大な枠組みの中で解釈される歴史というものをよい物であるとは思わない。考える範囲、内容を大きくすればするほど、切り捨てられる要素が増える。羽田さんの主張する地球規模で解釈された歴史がちょうど現代の世界の問題の解決につながるものであれば良いが、内山さんの主張する多様な可能性を持つ歴史解釈の方が、問題解決への筋道を多く考えることができるものではないかと思う。(C組男子)

授業では、こうした羽田の文章に対する批評文に対して、次のように支持する意見や反論が展開された。

(L)私は羽田さんの文章に対し、「まあいいのではないかな」となんとなく受けとめていた。地球市民としての帰属意識は確かに温暖化などの地球規模の問題解決の上で大切になるのではないかと。(J)、(K)の意見を通して、その考えに変化があった。羽田さんの論の非現実さに気づけたのだ。現実的に考えて、世界各国が協力して世界の歴史を共有する、ということは可能か。その答えはおそらく否である。(J)の言葉にあるように、わざわざ不利益を好む者はいないだろう。羽田さんの意見が本当に実現するなら素晴らしいと思うが、理想と現実はずしも一致するわけではない。現実を良く理解した上で理想を展開していかなければならないと思った。(C組女子)

(M)羽田さんが述べたいことは、もっと違うところにあるように私は思う。(J)の言う、自国が不利になる出来事を認められないこと、それ自体が自国文化の集団に対する強烈な帰属意識の表れであり、それでは地球がたちゆかないから世界で地球という帰属意識を持つと彼は言っているのであり、その帰属意識故に否定するのは違うのではないかと。また彼は何も全て統一などと言っているわけではない。社会という枠が広がった今、自国、自文化という狭い世界だけで片付くことなどほとんどない。同じ惑星で水や空気やその他様々な問題を共有すべきだと言っているだけだと思う。多主観の多視点による問題認識が大切なのではないかと。たいした理想論だとは思いますが、目指すことは悪いことではないと思う。(C組女子)

(N)(K)は文章の中で、「羽田さんは、国、社会全体によって異なる歴史解釈を世界全体で統一すべきだと主張している」と述べていたが、果たしてそうなのだろうか。参考資料の中で、羽田は「イギリスという国ではなく、世界がその(世界史の)枠

組みとなり、これ(イギリス国内での産業革命)とは別の解釈があってもよいはずだ」とは述べていたが、解釈を統一しようとまではしていない。「別の解釈があってもよいはず」なのだから、むしろ多種多様な解釈が存在することを肯定しているのではなからうか。さらに羽田さんは「ヨーロッパ中心の現行の世界史の解釈は相当程度相対化できる」と述べており、現代のヨーロッパ中心の世界史の解釈を改善しようとしているように思える。(C組男子)

(J)・(K)の意見は、(L)のように初めは羽田を支持していた学習者や、現在の「国民国家」の枠組みを揺るぎないものと考え、そう簡単には変わるはずはないとする学習者に広く支持されていたが、(M)・(N)の指摘によって、理解にずれがあった部分が修正され、実現可能かどうかは別にして、羽田の真意が正確に理解されるに至った。

4. 終わりに

学習者の書いた批評文をもとに、さらに批評活動をさせるという今回の単元において、特に意識したことは、優れた批評文だけを取り上げるのではなく、対立する意見や議論が展開されるであろうものを取り上げることである。取り上げた批評文には誤読を含む部分もあるが、そうした誤読も含めて解釈・理解の違いを指摘しあうことによって、その誤読も修正され文章の理解がより深まる効果があることに加え、自分の「批評」のありようが批評され対象化されることによって、意見を書く際にも誤解を招かない、よりよい表現を吟味しようとする姿勢が生まれてくると考える。

実際に、批評活動の実際で示した通り、批評活動2の中で学習者の誤読部分が本文に即した正しい理解へと修正されていることがわかる。

また、今回は「歴史」を題材として取り上げたが、羽田正『新しい世界史へ』を取り入れたことによる効果は大きかった。実際に羽田のいう「新しい世界史」が今後どういう展開を見せるのかは定かではないが、こうした「現在」・「これから」につながる教材を取り入れたことで、活発な議論が展開できたと考える。学習者の思考を促し、刺激するような教材を用意していけるよう教材開発に努めたい。